

児童養護施設で働く上で必要な養育観についての現象学的分析

児童養護施設 愛の聖母園

名城 卓 哉

和文要旨

本研究では、ふたりの児童養護施設で働く担当職員にインタビュー調査を実施し、それぞれの個別心理構造から、一般的心理構造を導き出した。児童養護施設では、被虐待児等の処遇困難な児童の増加から、暴力問題の発生、児童と職員との関係性の悪化、施設崩壊や職員のバーンアウトが問題視されており、どのように予防し介入するかが喫緊の課題となっている。既に良質なケアを実践している職員のインタビューから、必要な養育観を導きだし、児童養護施設での生活支援に役立てることが本研究の目的である。

研究方法は、Giorgiの現象学的心理学的アプローチを用いた。ふたりの非構造化面接から得られたデータを逐語録に起こし、意味単位に分けた個別的心理構造から一般的心理構造を叙述し、討論と展望を示した。

分析結果から、①子どもとともに住まう時空間を尊び、②愛情を受けてソーシャルサポートの中で子どもが生きていくことを望み、③担当職員が精神的な主軸となり、子どもの心身の成長を支え、④自他理解の必要性を重んじ、⑤人の個性が多様であることを子どもが生活の中で学び、⑥子どもの気持ちが汲み取られ、⑦職員のチームワークが良好に維持されるように語り合うことが、必要な養育観を構成することが示唆された。

キーワード：児童養護施設 養育観 現象学的分析

I 問題と目的

児童養護施設では、保護者のいない児童や保護者に養育されることが適当でない児童に対して、安定した生活環境を整え、生活指導、学習指導、家庭環境の調整等を行いつつ養育を行う。児童養護施設とは、児童の心身の健やかな成長とその自立を支援する機能をもっている（厚生労働省、2017）児童福祉施設のひとつの施設形態のことを指す。そして、児童福祉施設の中でも子どもがもっとも多く入所している施設となる。児童養護施設では、虐待を受けて入所した子どもが約6割り近くおり、発達障害や知的障害等を含む障害を持った子どもが3割り近くと高い水準を保っている。専門的なケアの充実が求められている。

また、厚生労働省の調査によれば、入所児童の平均在籍期間は4.6年、10年以上の在籍期間の児童が10.9%となっており、長期入所にいたっているケースも少なくない。社会的養護児童を可能な

限り家庭的な環境かつ安定した人間関係の中で養育することができるよう、施設ケア単位の小規模化も進んでいる。

被虐待経験を有する子どもが施設の中で増えていくことで、全国の児童養護施設では、実にさまざまな問題が起こっている。愛されるべき親から不適切な養育を受けて育った子どもは、心的外傷を受け、不安定な愛着関係を築いてしまっているため、心因性の反応やネガティブな自己認知・他者認知に陥り、それらが起因し多様な不適応行動を起こしてしまう。子どもが示す症状や不適応行動の質的变化に伴い、従来の施設機能や施設職員の対応力では太刀打ちできないほどに、負の連鎖が巻き起こっている施設もある（加藤、2012）。

施設生活の中で、感情コントロールの統制がうまくいかずに少しのことでキレて暴力的になる子どもや、性的な接触も含めた子ども間の暴力、年齢にそぐわない対人接触の仕方、学校での落ち着

きのない言動による集団の中での不適応、施設職員の声かけの無視や悪化すれば威圧や暴力によってパワーコントロールをかける事象等々、次から次へと解決困難な不適応行動や問題行動を呈する状況も少なくない。

すべての施設が、このような問題を抱えているわけではないが、こういった状況下である施設や施設職員は、疲弊していき、職員の離職や休職、バーンアウトにも繋がり、施設崩壊という末路に至るケースもある。特に小舎制児童養護施設での養育においては、子どもと近い距離ので養育ができ、良質な人間関係の再構築が可能で、子どもと担当職員が強い絆で結ばれている。心身の健全な成長を促せるというメリットがある一方で、ケア単位が小さいことによる抱え込みや、職員間の情報伝達の困難さも起きやすい状況にあり、メリットだけではなく課題を意識化していくことも必要となるであろう。

被虐待児童の入所率が高いことや何らかの障害を抱えた児童も一定数いるといった個の要因や、愛着関係の修復が発達途上にあるケース、施設職員の人手不足といった環境上の要因が複雑に絡み合い、虐待を受けていない児童や職員に負の影響として波及している。このように、深刻な問題となっていることは、一般的にはまだまだ知られていないといえるだろう。虐待的人間関係を維持してしまうことは、すなわち施設が関係性の障害を抱えているとも言い換えることができる。児童の発達上の課題への見立てと手立てを行いつつも、良好な関係性を取り戻す施設機能が求められている。施設養育の在り方に、パラダイムシフトが必要となってきた。

パラダイムシフトについて言及している田嶋(2011)によれば、まずは体験を重視するということである。児童福祉施設で暮らしている児童への発達援助では、体験できなかった発達段階をやり直すというよりも、既にやり遂げている発達の状態から新しく体験を重ねることで、積み重ねてきた児童なりの持ち味を活かして心の成長や社会への適応を促進するということが重要と主張されている。生活という基盤が重要視され、心理療法

等の個別的援助は、その児童の生活が安心・安全に包まれた状態で初めて機能するということである。

筆者は心理職であるため、臨床心理学的パースペクティブによる心理援助を施設入所児に提供するわけであるが、上述されるように生活の基盤が先にあつて、心理療法等の専門的な支援は機能するという主張に賛成している。

これまで児童福祉領域の処遇力向上を目指してさまざまなプログラムが開発されている。子どもの虐待防止センター(CCAP)によるほっとホットサロンや田嶋(2011)の安全委員会方式、日本子どものための委員会によるセカンドステップ、CAP(子どもへの暴力防止プログラム)等が挙げられる。実施施設の風土や文化に適合すれば、効果的に働くプログラムは散見されるが、既に提供されている良質なケアに焦点を当てられた実証研究は少ない。安定した生活のケアとそれを提供できる人がいて始めて、成長促進的にさまざまな介入が機能することは、見逃せない事実であろう。

以上の問題意識から、本研究では児童養護施設において、質の高い養育を実践している職員は、どのような考えや感覚で日々の養育に努めているか、すなわちどのような養育観をもち、子どもと生活しているかを質的研究法によって同定することを目的とする。養育者の自由な語りを通して、児童養護施設で働く上での必要な養育観を探索的に分析するため、自由度の高い語りから、自然と叙述される養育観について明らかにしていく。

Ⅱ 方法

本研究では、長年に渡り児童養護施設に勤務している職員の経験を、個別性を損なわずに明らかにしていくため、Giorgi, A.(2009/2013)の科学的現象学的方法による質的研究を行った。

質的研究法には、様々な手法があり、代表的なものにナラティブ研究、現象学、エスノグラフィー、事例研究、グラウンデッド・セオリー等があるが、Giorgiの方法は、哲学的現象学、人間科学的視点、心理学の3つを統合するアプローチをとっている。研究者が現象学的還元の中で、心理学的態度を持

ち、研究しているその現象に対する特別の感受性を持って、データの分析をできる Giorgi, A.(2009/2013) とその弟子である Wertz, F.J. (1983)の方法を元にした石井(2016)の方法を用いて分析を行った。

(1) 調査

調査時期

2017年9月

調査協力者

調査協力者は、鹿児島県内の児童養護施設で10年以上の勤務経験をもつベテラン職員女性2名である。同意を得ての実施である。以下、表1に調査協力者である2名の概要を示す。なお、年齢の明記はさけ年代のみの表記として、調査協力者IDは、調査を行った順番にA、Bとつけた。

調査者

調査者は、臨床心理士となって7年目の筆者である。調査協力者とは、同じ職場であり、仕事上での関わりも多く、互いに緊張することのない間柄であった。

表1 調査協力者概要

ID	A	B
性別	女性	女性
調査時年代	50代	30代
勤務歴（現職）	約24年	約14年
勤務歴（通算）	約31年	約14年
現職の施設形態	小舎	小舎
家族構成	故父、母、兄	故父、母、兄ふたり
援助対象者の年齢	2歳未満～21歳	2歳～20歳
援助対象者の性別	男女	男女

調査手続き

インタビューは、非構造化面接法で行われた。時間と場所については、調査者が指定した場所に調査協力者を招く形をとった。

インタビューは、担当職員として子どもを養育するうえで必要と思われる“養育観”に関する質問、子どもの成長で喜ばしいことに関する質問、若い指導員には、どんな指導員になって欲しいかという質問、他の職員の支援をみていて、参考になる“大切な養育観”についての質問を自由に語ってもらった。調査者の質問の位置づけは、あくま

で調査協力者の叙述の補助的役割にとどまり、回答の有無にこだわらず調査協力者の流れを尊重した。インタビュー時間は、1時間15分～1時間40分程度であった。

(2) 倫理的配慮

倫理的配慮、研究目的、内容などはインタビュー前に対面にて紙面を使って説明し、理解と了承が得られた後に、承諾の署名を求めた。

(3) 分析方法

本研究では、Giorgi, A.の科学的現象学的方法を用いている。Giorgi, A. (2009/2013)は具体的なステップを以下の4つに分類している。①全体の意味・感覚を得るための読み込み、②意味単位の決定、③参加者の自然的態度の表現の、現象学的心理学的に感受性のある表現への変換、④経験の心理学的構造の叙述、である。この4ステップを柱にGiorgi, A.の弟子であるWertz, F.J. (1983)のステップも参考にして、石井 (2016)は7ステップへと体系化した。この方法を用いて、科学的現象学的分析を行った。①インタビューの音声データを逐語録に起こす。②全体の意味・感覚を得るために読み込む。③調査協力者と調査者の対話を、発言者が特定できる形で3列からなる表の左側の欄に記入する。④調査協力者の叙述を、句読点にこだわらず、調査者の発言を跨ぐことも気にせず、意味の転換を経験する箇所で行き止まりし、意味単位を明確にする。⑤調査協力者の自然的態度からの表現を、意味単位ごとに現象学的心理学的に感受性のある表現へと変換する。すなわち今研究している現象に関して生きられている経験の心理学的側面を露わにする言葉へ変換する。変換後の叙述は、3列の表の中央に記入し、変換が足りない場合はさらに右側の欄に記入する。この時、研究者が自分自身の経験の分析ではなくて、ある他者の経験の分析を行っているということを明瞭にするため、一人称表現を三人称表現に変える。⑥調査協力者ごとの「個別的心理構造」を、変換された意味単位の最後の欄に基づいて想像自由変容を用いて検討し叙述する。⑦複数の調査協力者の経験を、その個別例あるいは特殊例として包括して理解する

「一般的心理構造」を叙述する。

構造は、ある生きられた経験を描くことを意図している。構造は、名づけられることになった現象がどのように生きられたかを形相的に描くことであり、それは、心理学的視点から見た経験的かつ意識的契機を含む。このことは一般的であるということを意味し、原則として構造はそれらが基づいた個人に留まらず、より多くの人に提供可能であるということができるのである(Giorgi, A., 2009/2013)。

なお、人間の個別の経験に関しても科学の考えが適用可能であると主張しているGiorgi, A. (2009/2013)は、科学的知識の基準として「自分自身による、また、他者による、批判的探求の段階を通過しなければならない」ことを認め、「研究方法論上の手続きをより具体的に詳細に示すこと」(Wertz, F.J., 1983)を科学的現象学的方法の条件としている。そのため必然的にこの方法は、インタビューの逐語録の提示を要請するが、本研究では、調査協力者の個人情報を考え、倫理的観点から逐語録の提示は控える。調査協力者による叙述の変換プロセスを提示するにとどめた。

また、この方法は現象学的還元の態度を用いて分析されており、還元の適否は多数決で決められるものではないことから、分析者は一人でも妥当性は保たれる(Giorgi, A., 2009/2013)と考えられ、実際の分析にあたっては筆者が一人で実施した。

Giorgi, A. (2009/2013)はその著書の中で、現象学的研究においては、少なくとも3名の被験者が必要とされると主張している。しかし、筆者は被験者の数に囚われず、被験者の経験の叙述を重んじるという現象学の基本的態度に立ち返り、被験者が2名でも分析は可能であると考え、研究を進めていった。

III 結果

(1) 調査協力者Aの結果

Aのインタビューによる叙述の変換された意味単位と変換過程を、表2に示す。次に、変換された意味単位の最後の欄について想像自由変容を用いて検討したAの「個別的心理構造」を、叙述する。

表2 Aによる叙述の変換された意味単位

変換された意味単位		変換された意味単位番号
Aは、養育親においてまず必要なのは愛情と考えていると述べている。		Ca 1
Aは、まず愛情を注ぐことがあって、今の勤務体制では特に子どもが生活感を持てるような関わりがしたいと思っていると述べている。		Ca 2
Aは、その生活感の中では、しつけのようなことや生活習慣を身につけてもらうといったこともあると述べている。		Ca 3
Aは、養育親について説明するのは、難しいことだと述べている。		Ca 4
Aは、一般家庭であれば生活感を考える必要もないが、児童養護施設での養育はあくまで仕事であるが、仕事で子どもと関わっているわけではないということを子どもに伝えていくことに一番こだわりを持っていると述べている。		Ca 5
Aは、以前の職場や現職の以前の体制であれば、子どもからどうせ仕事で関わっているのだらうという言動もあり、それがAには痛胸に刺さったと述べている。仕事であるが仕事でないという感覚がAの中にはあるのだった。		Ca 6
Aは、現実的には仕事であるが子どもには仕事で関わっていると思わせたくないと述べている。	Aは、現実的には仕事であるが、Aは一緒に生活している者であるので、子どもには仕事で関わっていると思わせたくないと述べている。	Ca 7
Aは、一緒に生活する者として子供に受け入れられていると感じているが、子どもの年齢が上がっていくと、嫌でも現実的なことは知っていくことになるであろうと述べている。		Ca 8
Aは、2歳から施設で預かっている子が小学校高学年くらいになると、施設で生活している意味がわかるようになり、施設職員が仕事として養育しているという現実を知るときはくるが、それいつかはききと知ってもらわないといけないことであると述べている。		Ca 9
Aは、現実を知る時がくれば、その話は子どもとちゃんとできると思っている。その時をちゃんと待ちたいと思っているのであった。		Ca 10
Aは、今養育している子どもたちでどうせ仕事でしようという子どもはいないけれど、年齢が低くとも保護者から施設職員は仕事として関わっていることを聞いてしまうこともあると述べている。		Ca 11
Aは、子どもが自分でここで生活していること自体が普通ではないことを知る時がきた時には、応援したい、見守りたいと思っている大人として、一緒にここにいたいことが仕事になっていると伝えたいと述べている。	Aは、子どもが自分でここで生活していること自体が普通ではないことを知る時がきた時には、仕事だという言い方はしないと述べている。応援したい、見守りたいと思っている大人として一緒にここにいたいことが、仕事になっていると伝えることが、Aの養育観の表現に近いものになるのであった。	Ca 12
Aは、子どもから施設職員が仕事で関わっているのかどうかを聞いてきた時に、その場で答えられる場合はそうするが、そういう話ができない場合には、外出している時や2人でいれる時に、この間こういうことを言っていたけどと切り出して説明をするかと述べている。		Ca 13
Aは、子どもは施設職員が仕事で関わっているのかどうか聞いた時には特に反応できないのではないかと述べている。Aは、現在担当している5人のうちの1人は年少からずっと関わっているが、その子は施設職員が仕事で関わっているというを感じていないか、もう感じているけど伝えて言わないか、年齢的には十分感じているはずなのだけれども言わないと、その子のこと考えながら述べている。		Ca 14
Aは、再度考え直して、この子はそのようなことを口に出す必要はないと思っているが、言ったところで現状を受け入れるしかなく何も変わらないと思っているからと予測し、その子の心情を読み取ろうとしているのであった。		Ca 15
Aは、その子の性格等にあわせて適時対応していければと思っていると述べている。		Ca 16
Aの気持ちとしては仕事で関わっているつもりはないので、子どもとは正直な関わりがしたいのであった。しかし、仕事であるという側面もあるので、仕事で関わっていないということはいいことではないかもしれないと述べている。子どもが自然と仕事であることを知ったりわかったりして、あっけらかんとなんだ仕事だったのかと受け止められるような子であれば、職員に言えた方がいいかもしれないと述べている。	Aの気持ちとしては仕事で関わっているつもりはないので、子どもとは正直な関わりがしたいのであった。しかし、仕事であるという側面もあるので、仕事で関わっていないということはいいことではないかもしれないと述べている。子どもが自然と仕事であることを知ったりわかったりして、あっけらかんとなんだ仕事だったのかと受け止められるような子であれば、職員に言えた方がいいかもしれないと述べている。	Ca 17
Aは、そう思うからといって、これからの生活に目が向いている子については、大人側から積極的に仕事であるかどうかについては話をしていないと述べている。		Ca 18

Aは、もちろんゲームをするにあたって自分のやるべきことを怠ったり、生活を乱すようなこととか、人に迷惑をかけるようなこととか嫌な思いをさせることはいけませんが、ゲームの世界だけに浸らずに人との関わりをそれなりにもてれば、叱責する必要はないと思うと述べている。	Ca 19
Aは、無理に欲求を抑えるようにすれば隠れでもするであろうし、むしろ執着させてしまうのではないかとと思うと述べている。	Ca 20
Aは、子どもの生活や体に支障がでなければ、十分好きなことをやれば先に進めると思っていると述べている。	Ca 21
Aは、子どもはお預かりしているわけがあるから、ルールに当てはめるよりも、今日のあなたも明日があり、将来があるという繋がりがあることへの意識が大切であり、今のことだけに大人が囚われたい関わりをしたいと思っているのであった。	Ca 22
Aは、自分で自分のことを分けるのは相当大変なことだと思っていると述べている。体質や性格に関係すると思うが、自分はこれ以上すると疲れてしまうというのを知ることができるようにしたいと思っていると述べている。	Ca 23
Aは、例えば、他の子どもは水遊びを2時間しても平気であるが自分は1時間以上すると疲れてしまうとか、自分のことを知るきっかけを持って欲しいと思っていると述べている。テレビを2時間以上見れば目が疲れて赤くなってしまうから目を休憩させようとか、おやつを食べ過ぎて夕食が入らなくなれば、おやつが多かったから入らないねと声をかけて、次のおやつは少なくしよう、あるいはもう少し考えて食べることで、次に繋がるようにして、自分のことを知っていくということをして欲しいと述べている。	Ca 24
Aは、他にも例をあげて、学校から帰ってきてからの手洗いやうがいも適当に済ませて、喉が痛くなれば、それまでの日々を振り返って伝えると述べている。手洗いをしたと子どもが怒れば、見守っていない大人に非はあるので、子どもを責めるのは違うと思うと述べている。	Ca 25
Aは、面倒くさいことはすぐに済ませてしまうのが子どもの特性であるので、一度痛い目にあっていってしまうと妄妄な表現ではない気もするが、どうしてそうなったか思い出すが、大事ではないかと述べている。	Ca 26
Aは、子どもは基本的には怖かったり、寝るのがもったいなくて寝たくなかったり、眠ろうとしないが、朝が起きた時には、昨日の夜は眠れなかったから朝が起きづらいねという一言を絶対につけると述べている。	Ca 27
Aは、子どもは基本的には怖かったり、寝るのがもったいなくて寝たくなかったり、眠ろうとしないが、朝が起きた時には、昨日の夜は眠れなかったから朝が起きづらいねという一言を絶対につけると述べている。しかし、Aはその声かけが本当にいいことかはわからずに、しているのであった。	Ca 27
Aは、年齢が低い場合は難しいが、4、5歳以上であれば、振り返ってみるのでもいいかと思っていると述べている。睡眠は時間よりも深さが大切であろうから、本来時間はあまり関係ないのであるが、朝起きにくい子どもに関しては、昨夜を振り返れるように話をしていると述べている。	Ca 28
Aは、子どもの朝の様子をみていてその夜には朝の状況を子どもに伝え返すことに重きを置いて、寝る時間だから寝るようにといった言い方はしないように心がけているのであった。	Ca 29
Aは、時間をみせるために時計は使うが、寝る時間だから寝なさいという風な子どもが時間に合わせる言い回しはしないのであった。	Ca 30
Aは、質の良い睡眠をとるには、日中に体をいっぱい動かして寝る前の時間を少しテレビから離す等の工夫をする大人側の心持ちもなくてはならないが、時間だから寝なさいというのは言わないほうが良いと思っていると述べている。	Ca 31
Aは、問題行動の予防は難しいと述べている。Aは、言葉の覚え始めには汚い言葉も覚えるものだし、覚えることが悪いのではないと述べている。	Ca 32
Aは、汚い言葉も覚えていないと使い方がわからないと述べている。暴言も覚えるという意味では大事だと思うと述べている。	Ca 33
Aは、暴言を使ってみて相手をすごく嫌な気持ちにさせた後には、どうしてそういうことを言ったのか問うと述べている。	Ca 34
Aは、暴力はさすがに失態であるが、やってみたいとわからないこともあると述べている。	Ca 35
Aは、問題行動と呼ばれるものも通過点と捉えていると述べている。問題行動と呼ばれるものも成長には絶対必要だと思っていると述べている。	Ca 36
Aは、子どもが暴言を使ってみて、大人の反応をみて言葉遣いを正されると、かまってもらえたらまた言ってみようという感じになると述べている。Aは、支援する側が問題とみるかどうかの捉え方だと思っていると述べている。	Ca 37
Aは、問題行動と呼ばれるものを防げるのなら教えて欲しいと述べている。	Ca 38

Aは、自分や他者を大事にするということと小さい頃から学んで欲しいと学んでいって欲しいが、現実的にどれがそうなのかと言われたら説明が難しいのであった。	Ca 39
Aは、日常的に大人同士で子どもが大切に思われていると感じられる伝え方をしたいと話していると述べている。	Ca 40
Aは、口調によって伝わり方は違うし、意外と子どもはどんな風に言われたかを覚えているものと述べている。Aは、同じ言葉を言うにしても口調やタイミングで子どもは全く違うように受け取るし、同じ事を言っているにしてもあの言われ方が心が痛いとか、大人でも感じるほどであるから子どもはもっと感じるだろうと思うと述べている。	Ca 41
Aは、子どもの心の痛みに敏感なのであった。	Ca 42
Aは、大切に思われているから怒られたり注意を受けたりするというのを子どもにわかってもらえるようにしたいと述べている。	Ca 43
Aは、それをできているかどうかはわからないと述べている。	Ca 44
Aは、チームで子どもを抱えているため、チームでフォローすることもあったり、ひとりで時間を空けて注意の意図を伝えることもあったり、ひとりでできる人ともうでない人や、伝え直しがしにくい状況もあると思うと述べている。	Ca 45
Aは、怒った後にしばらく時間が経ってから子どもにあなたのことを大事に思っているからだよ、あんなことしたら自分が傷つくでしようと言えるが、感情的になった場合は後のフォローも難しくなると述べている。人として許せないといったような内容の時には、本人同士での意味の伝え合いは難しくなるので、子どもにも大人にもフォローはしたいと思うと述べている。	Ca 46
Aは、せっかく大人が頑張って伝えたのに、子どもに怒られた感覚しか残らないなら意味はないと述べている。	Ca 47
Aは、大人の気持ちも子どもの成長も大事にしたいのであった。	Ca 48
Aは、問題行動が起こった後には、その内容にもよるが、とりあらず話は聞きたいと述べている。Aは、どうしてそう言ったのかは聞きたいと述べている。	Ca 49
Aは、子どもが言葉にして答えられるかはわからないけれども、できるだけ聞いていきたいと思っていると述べている。何か理由があるのか、それともただの好奇心なのかで大きく違う気がするから、聞いた上で試してみようかどうかなと尋ねたいと述べている。	Ca 50
Aは、他者を傷つけるようなことや自分を傷つけるようなことであれば、気持ちを聞くことより先に注意をすることもしたいと述べている。	Ca 51
Aは、Aの言葉の表現が足りなくて注意の言葉が先にでないのだと思うと述べている。Aは、怒るにはちゃんと言葉での表現方法を持っていないといけないうと述べている。Aは、その言葉の表現を自分は持ち合わせていないのではないかと述べている。	Ca 52
Aは、他者や自分を傷つけることはやめさせたいので声を荒げてで怒ることはできると思うが、少しくらいのことではあればなぜそうしたのかとまず聞いてしまおうと述べている。	Ca 53
Aは、きつと小さい子どもの一番最初の万引きの時には、駄目なことだとちょっと厳しく怒ることができるかもしれないと述べている。	Ca 54
Aは、自然と今の感覚を身につけてきたかと思ってもいるし、学んできた部分も大きいかもしれないと思っていると述べている。	Ca 55
Aは、子どもとちゃんと話をするには、大人が先に興奮してしまい子どもを叱責するので、子どもも興奮して言い返そうとするので、まずはどうしてそのような事態になったのかを先に聞かなければ、子どもの気持ちや言葉を抑えてしまおうと思っていると述べている。	Ca 56
Aは、自身の性格的にも、格好良く大人な感じで子どもを叱責することがあまり得意ではないと思うと述べている。	Ca 57
Aは、子どもの成長で喜ばしい事について、子どもが優しい言葉遣いができたり、人に優しくする言動をみるのが嬉しいと思うと述べている。例えば、子どもが自分もらったおやつを他者に分けてあげたいと思うような言動があれば、Aはこれを喜ばしいことと捉えるのであった。	Ca 58
Aは、子どもが自分の好きな物事や嬉しい物事をわかっていことが喜ばしいことと述べている。	Ca 59
Aは、当園の子どもたちの中には、悲しいときとか寂しいときに母親を求めて心の中で叫ぶことができない子どもが多いと思うと述べている。	Ca 60
Aは、乳児院から来ている子どもたちは、心の中で母親を呼ぶことが欠けている子どもであると述べている。Aは、3歳くらいまで母親と一緒にいた子どもは恐らく母を求めることができるが、それがない子どもの根の部分はすごく切ないと思うと述べている。	Ca 61
Aは、母親でなくても心の中で叫んで助けを求める人を誰か見つけることができるし、いいと思っていると述べている。そしてそれはきっと、子どもからの感覚の問題になると思うとAは述べている。	Ca 62

Aは、誰かに助けを求めることが乳児院から来た子どもでもできるようにして欲しいと願っている。しかしAは現実的には結構難しいことであると述べている。		Ca 63
Aは、子どもが生まれてすぐに母親から離れてしまうことがすごく問題だと思うと述べている。	Aは、子どもが生まれてすぐに母親から離れてしまうことがすごく問題だと主張するのであった。	Ca 64
Aは、生まれてすぐに母親と過ごす経験だけは取り返しがつかないものだと考えていると述べている。Aは、子どもには少しでも母親と過ごしてもらいたいと述べている。		Ca 65
Aは、当園に乳児院を併設して欲しいくらいだと述べている。	Aは、当園に乳児院が併設されて、同じ養育者が継続的に子どもを育てることができれば、ある程度取り戻せる部分もあるのではないかと期待しているのであった。	Ca 66
Aは、若い指導員には自分らしさを大切ににして、子どもたちと関わって欲しいと思うと述べている。		Ca 67
Aは、ここで働き続けることをその若い指導員が選べば、できるだけ自然体で過ごせる力、抜いた力を持って欲しいと述べている。		Ca 68
Aは、仕事という感覚よりは、自然で過ごせる自分を持って欲しいと思うと述べている。		Ca 69
Aは、新しい職員へは何が好きかを聞くに述べている。Aは、して欲しいこととやして欲しいことを持っていて欲しいと言ったと述べている。		Ca 70
Aは、新任職員が自分を持ち、何が好きかをアピールする力を持って欲しいと述べている。		Ca 71
Aは、新任職員で言葉の言い回しがすごく上手な者がいると述べている。Aは、小さい子どもと特別支援学級及び学校の子どもの声かけは似ているところがあるが、その新任職員はそういう子どもへ声かけが上手だと述べている。		Ca 72
Aは新任職員から学ぶと述べている。		Ca 73
Aはその新任職員は、言葉が丁寧であるし、言葉尻が優しいと述べている。		Ca 74
Aは、大人の個性も大事であるし、存分に個性を出して欲しいと思っていると述べている。		Ca 75
Aは、子どもたちにとっても、当園での生活は小さな社会なので、色々な人があるということとをわかってもらった方がいいと思うと述べている。		Ca 76
Aは、大人が自然体でいられることで子どもの自然体でいられると思うと述べている。Aは、家庭感を感じることが職員も長く続けていける秘訣であると思うと述べている。		Ca 77
Aは、自分のプライベートともちろんギャップはあると思うが、緊張感で仕事をされるよりも、ここにいでもちろんと息ができて、ご飯が食べれて、トイレにもいけて、笑ったりできて、というのが自然体でいることと述べている。		Ca 78
Aは、大人が過ごしやすい環境が子どもの居心地の良さにも繋がるのではないかと意見に賛同するのであった。		Ca 79
Aは、大人が全く緊張感がないというわけには絶対いかなないと述べている。		Ca 80
Aは、すごく丁寧に子どもの気持ちを拾って言葉に変える練習を手伝う姿勢やスキル、褒めようとするところをみるとすごい職員だと思うと述べている。		Ca 81
Aは、子どもと言い合いになるのが悪いわけではないが、そういった対応をしている子どもと大人が言い合いになることもないと述べている。		Ca 82
Aは、同じ事でも解決するまで根気強く関わられる職員もすごい職員であると述べている。		Ca 83
Aは、少し前までは自然体で子どもたちと生活ができていたかと思うと述べている。		Ca 84
Aは、大人の数も増えて子どもの構成も変わり、若手も頑張ってくれており、Aも退くことを考えないといけないと述べている。		Ca 85
Aは、退くことを考えて少し引いているが、少し前までは自分の家と考えるが、子どもたちと一緒にいたし、時間を使えることが自身の強みかもしれないと述べている。	Aは、退くことを考えて少し引いているが、少し前までは自分の家と考えるくらい子どもたちと一緒にいたし、時間を使えることが自身の強みかもしれないと述べている。Aは、生活感をだし、養育しているのであった。	Ca 86
Aは、他者や自身の強みを広めていくには、語り合うしかないと述べている。		Ca 87
Aは、所属ホームにおいては職員同士が話す時間を大事にしていると述べている。		Ca 88
Aは、若手は本当は話に付き合うのは面倒と思っているかもしれないが付き合ってくれることに感謝しているのであった。		Ca 89
Aは、語る中で若手も自分が経験したかのような気持ちで共感してくれたり、語る時間を大事にしてくれると述べている。		Ca 90
Aは、若手が自分たちのあるべき姿ややりたいこととか見つけてくれたり、やりたいことを実行するために努力してくれるので、話すことは大事なことだと思うと述べている。		Ca 91

Aは、話の内容によってはつらいときもあるが、基本的には楽しくなるお酒というアイテムがあるので話は盛り上がるかと述べている。		Ca 92
Aは、お酒を飲みながらであれば言葉をなかなか出せない人でも話ができたりすると述べている。		Ca 93
Aは、食べながらしゃべったり、気になることがあればスイーツを買ってきてその場を盛り上げながら話したりすることで、心を割って話しやすいと述べている。		Ca 94
Aは、かしこまると心を割って話すのは難しいと述べている。		Ca 95
Aは、仕事には関係のないテレビの話や本の話から始めて、後の方で若手が思っていることを聞けると述べている。		Ca 96
Aは、年上が年下に話しかけるときは、責められていると思わないようなしゃべり方をしないと述べている。Aは、当然責められるようなことは例外であるが、状況を聞ききたったり、疑問に思ったことを聞く場合には、若手が話しやすいような声かけをしないと述べている。		Ca 97
Aは、若手が自分の話や何気ない話を話した後には本当の聞きたい話が聞けたり、話したい話ができてと思っていると述べている。		Ca 98
Aは、夜に小さい子どもと大人が少し仮眠をとって、その後の大人が語り合う時間がすごく大事と述べている。		Ca 99
Aは、語り合う中で、若手の知らない当園の歴史を伝えられ、社会的養護と呼ばれる子どもと子どもの状況も変わってきていることを知ってもらうことができる		Ca 100
Aは、若手のひとりもかなり思いを持って頑張ってくれていることをありがたいと思っていると述べている。		Ca 101
Aは、常々職員への感謝の気持ちを持って生活しているのであった。		Ca 102
Aは、彼女のやる気に加えて、語り合える状況が所属ホームや彼女の強みになっていると思えるのであった。		Ca 103
Aは、彼女が入職当初から自分の弱点として本施設を知らないというのを彼女自身も思っていたし、また周りからもそういう風に思われているのではないかと感じていたようであるが、今はそれも乗り越えて頑張っているなど関心していると述べている。		Ca 104
Aは、インタビューの感想として、ちゃんと考えて支援をしていないと改めて思ったと述べている。		Ca 105

(2) Aの個別的心理構造

大舎制の児童養護施設での勤務経験もあり、小舎制の児童養護施設で20年以上勤務し、通算継続勤務年数は約30年となる50代女性のAは、養育観に必要なのはまず愛情であると主張している (Ca1)。Aが特にこだわっているのは、生活感をだす生活支援である (Ca2・Ca5)。なぜなら、児童養護施設での養育は仕事であるため、意識しなければ子どもたちに仕事で関わりを持たれていると思わせ、子どもたちを傷つけてしまうからである (Ca6)。生活感というものの中には、子どものしつけや生活習慣の安定を図るといったことも含まれている (Ca3)。Aは、養育観について説明することに難しさを覚えている (Ca4)。

Aは、子どもたちに一緒に生活する者として受け入れられているという感覚はある。しかし、子どもの年齢が上がるにつれ、子どもは嫌でも施設の職員が職業として子どもの生活支援をしていることを知る時がくると明言している (Ca8)。2歳から施設で預かっている子どもは、小学校高学

年くらいになると実親と暮らせずに施設で生活をしているという意味をわかるようになる。そういった子どもたちは、施設職員は仕事で養育していることを知ることになる。Aはそれも知ってもらえないといけないことであると思う一方で、子どもが傷つくことを思うと、Aはとても複雑な気持ちになってしまう (Ca9)。Aは、話をしなければならぬ時期がくれば、しっかりと説明をしたいし、その時をちゃんと待つという気持ちが強い (Ca10・Ca12)。Aにとっては、関わる子どもへの気持ちが先にあって、仕事であることはあくまで付随するものであり、応援したい気持ちや見守りたい気持ちを伝えていきたいのである (Ca12)。

Aは、子どもから施設職員が仕事で関わっているのか尋ねられた場合は、その場で答えられる状況であれば話をするが、そうでない場合はふたりきりになれる時空間を選んで伝えてきている (Ca13)。

Aは、2歳時からずっと関わりのある現在中学2年生の男児Zについて語っている。Zは、現実的には職員が仕事で関わっているとわかっているが、職員の養育態度から仕事での関わりと感じていないか、仕事での関わりであると感じているが敢えて言わないか、どちらかであると思われるが、Aは確認したことがない (Ca14)。またAは、再度考え直し、Zは仕事で関わっているのかどうかを口に出す必要はないと思っているか、言ったところで現状を受け入れるしかなく何も変わらないと思っているか、どちらかでもあろうと予測し、Zの心情を読み取ろうとしている (Ca15)。

Aは、子どもが職員が仕事で関わっているということを知ったとしても、ショックを受けることなく受け止められるタイプの子であれば、その子が職員に、仕事での関わりであることを知っていると伝えてもいいかもしれないと考える (Ca17)。しかし、そうAが考えるからといって、これからの生活に目が向いている子に、Aから積極的に仕事であるかどうかについて話をしていないし、Aは無理に話す必要はないと思っている (Ca18)。

Aは、子どもがゲームをすることについて、自分のやるべきことを怠ること、生活を乱すようなこと、人への迷惑や嫌な思いをさせることはいけ

ないが、ゲームの世界だけに没頭せずに人との関わりもそれなりに持つことができれば、叱責する必要はないと考えている (Ca19)。Aは、ゲームに限らず無理に子どもの欲求を抑えるような働きかけを大人がすれば、子どもはその欲求を満たすために隠れてでもするであろうし、むしろその欲求に執着してしまう危険性があるのではないかと危惧している。Aは、子どもは十分に好きなことをやれば先に進めると考えている (Ca20・Ca21)。Aは、子どもはお預かりしているわけであるから、子どもをルールに当てはめるようなことはしたくないのである。今日のあなたも明日があつて、将来があるという繋がりや連続性を大人が意識し、今のことだけに大人が囚われないような関わりをしたいのだった (Ca22・Ca29・Ca30)。

Aは、自分で自分のことを分かるのは相当大変なことだと思っている。Aは、生活支援の中で、子どもが自分の体力の限界や食することの限界、また十分な睡眠時間の確保の仕方に気づけるように見守っている (Ca24・Ca25・Ca26・Ca28・Ca29)。柔らかい表現で子どもを諭し、うまくいかなかったことが子どもの自覚の基に正されていくことを大切に思うのである。Aは、大人は子どもを見守る責務があり、子どもが生活の中ですべきことをしていないことがあっても、落ち度は大人側にもあるわけであるから、子どもを一方的に責めることに違和感を持っている (Ca25)。

Aは、問題行動を予防するのは難しいと表現している (Ca32)。問題と捉えられがちな暴言については、汚い言葉は覚えるものだし、覚えないと使い方もわからないので、使った後にどういう気持ちでその言葉を使ったのかを聞いていくことに意味があると認識している (Ca33・Ca34)。Aは、問題行動と呼ばれるものは子どもが成長する過程において絶対に必要なものであると主張する (Ca36)。

Aは、日頃からチームの大人同士で子どもが大切に思われていると感じられる伝え方をしようと話し合っており、子どもとコミュニケーションをとる上では、口調に気をつけている (Ca40・Ca43)。口調やタイミングによって子どもへの伝わり方はまるで違うので、Aは子どもの心が痛ま

ないような口調に気をつけ、チームとしても意識できるようにしているのである。子どもに大切に思われているから注意を受けているということを知ってもらうために、チームでフォローすることもあるし、ひとりで時間差をつけてもう一度伝えることもある。子どもには、自分が傷ついてしまうということを伝える。子どもにわかってもらおうと、頑張って伝えた大人にもフォローできるようにしている (Ca43・Ca45・Ca46・Ca47)。

Aは、内容にもよるが問題行動が起こった後には、話をしっかりと聞きたいと考えている (Ca49)。Aは、自他を傷つけるようなことであれば気持ちを聞くことよりも先に注意をするかもしれないが、何か理由があるかただの好奇心かで大きく違うので、話を聞いた上で、試みてどうだったか確認していくのである (Ca50・Ca51・Ca53)。Aは、自身の表現力が足りなくて怒ることができない、あるいは怒ることがあまり得意ではないからしないのではないかと自己分析している (Ca52)。Aが最初に怒ることに抵抗を示しているのは、大人が先に興奮して子どもを叱責してしまえば、子どもも言い返そうと思うからである。まずは話を聞かなければ心に蓋をしてしまい、子どもの言葉での表現が抑えられてしまうと思うからでもある (Ca56)。Aは、このような養育観を身につけたのは、園の生活で学んできた部分が大きく影響しているかもしれないと思っている (Ca55)。

Aは、子どもが優しい言葉遣いができたり、人に優しくする言動をみると嬉しく思うのである (Ca58)。加えて、Aは自分の好きな物事や嬉しい物事を子どもがわかっていることも喜ばしいことであると感じている (Ca59)。

Aは、特に乳児院から当園にきた子どもたちは、心の中で悲しい時や寂しい時に母親を求めて心の中で叫ぶことができないので、母親でなくとも誰かに助けを求められるようになって欲しいと願っている (Ca60・Ca61・Ca63)。しかし現実的には厳しいものだとも認識している (Ca63)。Aの経験的に、3歳くらいまで母親と一緒にいた子どもは心の中で母親を求めることができるが、それがない子は叫べないし、根の部分にすごく切ない

ものを抱えていると主張する (Ca61)。養育者が方向づけて与えられるものではないが、Aとしては母親でなくても心の中で叫んで助けを求められる誰かがいるといいと思っている (Ca62)。Aは、生まれてすぐに母親と過ごす経験だけは、埋め合わせができないので、少しでも母親と過ごす時間を子どもたちにはもって欲しいのだった。

Aは、若い指導員には自分らしさを大切にして、ホームでは自然体で過ごし、程よく力を抜いて子どもと生活を共にして欲しいと思っている (Ca68・Ca69・Ca74)。大人が自然体でいることで子どもも自然体でいられ、大人も長く続けていけると確信している (Ca77・Ca79)。自分がして欲しいこと、して欲しくないこと、好きなこと等を伝えられる職員であることを望む (Ca70・71)。Aは、新任職員の良き面を感じ取っており、見習いたいとまで表現するのであった (Ca72・Ca73)。大人の個性も大事で、存分に個性を発揮して欲しいと思うのは、当園での社会は小さな社会なので、色々な大人がいることを子どもたちにはわかって欲しいからである (Ca75・Ca76)。Aは、子どもの気持ちを丁寧に拾って別の言葉に変えることが上手な職員や、根気強く子どもと関われる職員、やる気に溢れている職員をすごい職員と賞賛するのであった (Ca81・Ca83・Ca101)。

Aは、自身の強みについて、以前までは自然体でいられたこと、所属ホームを自分の家と思えるくらい子どもと生活ができていたことをあげている (Ca84)。時間が使えることも良いところかもしれないと感じている (Ca86)。

Aは、他者や自己の強みを広げていくには、語り合うしかないと考えている (Ca87)。所属ホームにおいては、話す時間を大事にしている。そういった場で、ベテラン職員から当園の歴史を伝承することもある。また、若手が自分のやりたいことを見つけて実行するための良い語り合いの場ともなっており、Aは所属ホーム職員にはいつも感謝しているのである (Ca89・Ca90・Ca91・Ca102)。

時にはお酒を交わしながら語ることで、語りが苦手な人とも話ができる。甘いものを食べたら談笑することもあり、緊張感が少しでもほぐれるよ

うにAは工夫をしている（Ca93・Ca94）。Aは、かしこまると心を割って話をするのは難しいと考えており、テレビや本の話から始めて、本当に聞きたい話やAが伝えたいことは後にもってきた方が、Aが気になっていることが聞けるし話せると思っている（Ca95・Ca96・Ca98）。また、Aは若手への配慮として、責められていると受け取らないように状況を聞いたり、疑問に思ったことを聞く時には、若手が話しやすいような声かけを心がけている（Ca97）。Aは、語り合う中で、若手の知らない当園の歴史を伝えられ、社会的養護と呼ばれる子どもとその状況も変わってきていることを知ってもらうことができると認識している（Ca100）。Aは、若手のやる気と共に、よく語り合えるホームの状態を維持しているのであった（Ca103）。

(3) 調査協力者Bの結果

Bのインタビューによる叙述の変換された意味単位と変換過程を、表3に示す。次に、変換された意味単位の最後の欄について想像自由変容を用いて検討したBの「個別的心理構造」を、叙述する。

表3 Bによる叙述の変換された意味単位

変換された意味単位	変換された意味単位番号
Bは、必要と思われる養育観という言葉に困惑し、答えるのが難しいと述べている。	Cb 1
Bは、担当の子どもが必要としない限りは自分からは離れないという養育観が大切であると思うと述べている。Bは、子どもが見放されたと思わないように養育しているのであった。	Cb 2
Bは、子どもに離れられたと感じさせないために、長く所属ホームにしていると述べている。	Cb 3
Bは、入所してきた子どもがBが毎日いる人だと分かるまではホームにしているように述べている。	Cb 4
Bは、それを勝手にしていることだと述べている。	Cb 5
Bは、学生時代に遠方から通っている現職の先輩職員に、家に帰らずに職場ばかりにいて大丈夫なのかと質問したことがあると述べている。その職員はあまり家に帰らずとも自分の子どもにとっては帰ってしまえばすぐに父親になるが、園にいたる子は3日離れてしまうと関係性が希薄になってしまうので、園にいたるようになっていると述べており、その影響も受けて園にできるだけのようにしている	Cb 6
Bは、小舎制の児童養護施設や住み込みで働くことについて、県外の施設実習を通して知り、誰かがいることが当たり前のおうち作りをしたかったと述べている。	Cb 7
Bは、特に入所したばかりで住み環境が変わってしまった子どもに対しては、大人が入れ替わり立ち代り変わってしまうのではなくて、この人は当たり前毎日いる人だと感じて安心して欲しいと述べている。	Cb 8
Bは、入職当初は子どもが次いつ来るのかとか、同じ経本をまた読んでねとせがむ姿や、今日は誰かご飯を一緒に食べるのか確認する子どもの姿をみるのがすごく苦痛なのであった。	Cb 9

そこで、ずっと一緒にいたら明日もいようと言ってあげられるから、Bは住み込み職員になりたいと思ったと述べている。	そこで、Bは子どもの心の痛みを感じ取り、明日もいようと言ってあげられずと一緒にいることができる住み込み職員にないと思ったと述べている。	Cb 10
Bは、3年目から住み込み職員となったと述べている。		Cb 11
Bは、その実習を経て住み込み職員として働きたいと思い、別の児童養護施設に就職が決まりかけていたが、その施設の体制と自分がやりたいことが合わないと言っていたところ、施設側から断られて現職の施設に非常勤職員として雇われることになったと述べている。		Cb 12
Bは、入職当初から住み込み職員として働きたい気持ちがあったと述べている。		Cb 13
Bは、Bが入職する時点で、Bの住み込み職員として働きたいという思いは、他職員へも伝わっていたと認識していると述べている。		Cb 14
Bは、当時4歳の男児がC職員が宿直の時には横で寝て、D職員とE職員時にはベッドまで来てもらって寝かしてもらい、F職員の時にはスリッパで誰かを確認して寄り付かず、Bの時には自分のベッドで一緒に寝てもらおうという動きをみて、こんなに幼い子どもが誰か宿直かによってこれだけ色々な動きをすることに驚き、いつ目が覚めても安心できる人があるのが大事だと思ったと述べている。		Cb 15
Bは、小さい子どもか大きい子どもかで誰か宿直するのか聞く意味合いも違うと思うが、夜の安心感を得るための質問であると思うと述べている。		Cb 16
Bは、子どもの中ではひと月のうちに一日でもいなければいつもいないことになってしまうので、いつもいると子どもに感じてもらえるように働こうと思っていると述べている。		Cb 17
Bは、いつもいるわけではないという子どもの言葉に、働く大人としての悔しさを感じていたのだ。		Cb 18
Bは、言葉でいくらいつもいようと言っても子どもの安心感には繋がらないため子どもが自分からBはいつもいるねと感じてもらえるまでは、ホームにしているようにしていると述べている。		Cb 19
Bは、以前は経験的に小さい子どもの方が大人がいつもいつことを感じ取るまでに時間を要すると思っていたと述べている。Bは、実際は大きい子どもよりも小さい子どもの方がいつもいると感じてもらえるまでに時間がかかることに衝撃を受けたのである。	Bは、以前は小さい子どもの方がBがいつもいる職員であることを感じ取るまでに時間を要すると思っていたが、実際は大きい子どもの方が時間を要することに衝撃を受けたBなのである。	Cb 20
Bは、子どもにもよるのであるが、新しい環境の中で子どもの世界を広げていく際に、いつもいる大人という軸があることで、そこから外へ出たり戻ってきたりすることができると述べている。		Cb 21
Bは、その軸になる大人だけが中心となるのではない、最初の地点になると思うと述べている。		Cb 22
Bは、傷ついて入所してきた児童の回復過程においても恐らく安全基地の役割は必要であると思うと述べている。		Cb 23
Bは、性的虐待で入所してきた高校生女児Gについては、特に配慮したことがあると述べている。		Cb 24
Bは、そういったケースの場合は、沢山の大人が関われば良いというわけではないと思われたので、他職員には早めに痛楚してもらえ等して、BとGと個別の時間を通して関係作りを行ったと述べている。		Cb 25
Bは、他の子どもや大人がいれば性的虐待の話はしづらいため、Gがひとりでもややとした気持ちを抱えてしまわないよう、話をしたい時にはBがひとりという空間作りをしたと述べている。		Cb 26
Bは、他のケースの場合は子どもと大人が一対一で関わられるように、複数大人がいれるようにすることもあったと述べている。しかし、Gの場合は違った対応をしたのだ。Bは、ケースによって適当と思われる大人の配置を考え、工夫をする職員なのであった。		Cb 27
Bは、当時は男性職員はいたが、担当職員として入っているわけではなく、その女児と接触する時間は少なかったが、その男性職員や他の女性担当職員とも話をし、そういった援助の方針になったと述べている。		Cb 28
Bは個人の考えで援助方針を決めず、チームで話し合っていたのであった。		Cb 29
Bは、長い期間Gとの関係作りを行ったと述べている。Bは、リビングで自然とながら、テレビを見ながら、自然とそういう話になったと述べている。	Bは、生活の場でリラックスした雰囲気を作るため、敢えてリビングでごろごろしたりテレビを見たりしながら、長い期間Gとの関係づくりを行ったと述べている。	Cb 30
Bは、チームで方針を共有していたが、必ず毎回同じようにしていたりはなかったと述べている。ただだからやっていたと述べている。		Cb 31

Ｂは、ＢとＧとの関係が深まった後には他職員も自然と関わるようになったと述べている。		Cb 32
Ｂは、かしこまった場を設定して話をするのはなく、リビングでヨロコブがいたり、テレビをみたりしながら、Ｇが性的虐待について語れば話を聞いたと述べている。		Cb 33
Ｂは、日常的な環境の方が語りやすいと思っていたのだった。		Cb 34
Ｂは、リビングで他の子どもたちがマッサージをしてもらっている時に、Ｇも一緒に横になって、性的虐待の話になったこともあると述べている。		Cb 35
その他にも、他の子どもたちが寝た後に、Ｂが何もせずにテレビを見ていたら、おやすみと言いきたＧが自分も一緒に見たいと言って、性的虐待の話をしたこともあったとＢは述べている。		Cb 36
Ｂは、個々の子どもに合わせた配慮をする力を、自身の入職前の経験と入職後の経験から得た力だと思っていると述べている。		Cb 37
Ｂの家庭は転勤族であり、自分が人の輪の中に入ることでその空気がどのようになるかとか、人の目を気にすることや、人によく観察することを習慣的に身につけてきたと思うと述べている。		Cb 38
Ｂは、小学６年生の頃の論文大会で、色々な出会いや別れを経験しているから、人よりも感受性が強いと発表したこともあるのであった。		Cb 39
Ｂは、女兒のグループを作る習性が苦手だと述べている。Ｂは、ひとつのグループにいたいことは好まず、色々なところでつなぐこなすタイプの子どもであったと述べている。		Cb 40
Ｂは、生き抜いていくためにそういったスキルを獲得してきたと述べている。		Cb 41
Ｂは、自身の体験が入所してきた子どもの不安定な感情の理解に繋がっていると述べている。		Cb 42
Ｂは、以前いた場所になら後姿を引かれる思いがありつつも、それを気にしていたら生きていけないので、新しい環境で自分がなじまないといけないという戦いにも似た感覚を覚えており、入所児童の気持ちがわかると述べている。		Cb 43
Ｂは、問題行動の予防は難しいと述べている。		Cb 44
Ｂは、予防するには、自分ひとりでは対応できないので、色々な視点を持った人たちに協力を求めるしかないと思述べている。		Cb 45
Ｂは、自分だけだと気持ちに余裕がなくなってしまうと述べている。		Cb 46
Ｂは、問題行動の兆候がなければ予防をすることも難しいと考えていると述べている。		Cb 47

Ｂは、問題行動の兆候を感じたら、色々な人からの視点を持った人たちの協力をもちと述べている。その色々な人というのは、ホームの担当職員であったり、ホーム外の職員であったり、学校の先生であったりすると、Ｂは述べている。		Cb 48
Ｂは、子どもに問題行動がないことがないと述べている。		Cb 49
Ｂは、そう思いながらも問題行動があると焦ってしまうと述べている。		Cb 50
Ｂは、施設の子どもに限らず、すべての子どもに問題行動はあるものだと思っていると述べている。		Cb 51
Ｂは、問題行動が起こるかどうかは、子どもの家庭環境にもよると述べている。		Cb 52
Ｂは、問題行動の事後対応について、予防とも関連してくるが、子どもたちのケアは丁寧にしてあげることが、問題行動が起こってしまえば自らの支援で足りない部分があったであろうと反省すると述べている。		Cb 53
Ｂは、もっとやることがあったのではないかと、違うやり方があったのではないかと、支援を振り返ると述べている。		Cb 54
Ｂは、担当職員は問題行動が起こった後には、養育の見直しが必要と思っていると述べている。		Cb 55
Ｂは、問題行動には、子どもたちが何かを訴えている面もあると思うと述べている。		Cb 56
しかしながら、それが施設生活のことなのか、入所前のことと関係しているのかはわかりかねるが、何か行動として出したいものがあつたのではないかとＢは考える述べている。		Cb 57
Ｂは、問題行動の原因になったことがわかるように、その子どもと話をしたりとか、大人が考え得る限りの想像をして、支援で足りなかった部分や工夫を部分について話をするこがひとつあると述べている。		Cb 58
そして、その表現の仕方については、子どもに見直す必要があることは伝えていくと述べている。		Cb 59
子どもが間違った表現の仕方をしていないとして欲しかった表現を伝えると述べている。		Cb 60

Ｂは、そういったやり取りをしていくと述べている。		Cb 61
Ｂは、他の担当職員も問題行動が起こった後には、同じように対応していると思つと述べている。		Cb 62
Ｂは、問題行動が起これば担当職員だけではなく、職員全体で関わるので、同じ感覚でやっていると思うと述べている。		Cb 63
Ｂは、他の職員へも信頼を寄せているのであった。		Cb 64
中学生の女兒Ｈが最近Ｂに相談しに来て、双子の姉にすくく苛々するが、苛々するのはその姉のみで他の人にはなく、自分で線引きはしている話をしたことからは、Ｂは、自分と心の距離が近い人に対しては要求も増えしてしまうのだと説明したのだった。		Cb 65
Ｂはその際に、Ｈが学校で他児が親の文句を言うことと自分が抱えている苛々の感情が近いことに気づいて、苛々を爆発させる前に言葉で表現していることにＢは感心し、その女兒の成長を感じて嬉しく思ったと述べている。		Cb 66
Ｂは加えて、卒園した子どもが中学３年生の時分に塾から帰ってくるのが遅く、一人で職員が犬の散歩に連れて行くことにみせて、職員が犬の散歩に連れて行くことにみせて、その時は素直に反省はできなかったものの、１年後にひとつ年下の子どもが同じような行動をとった時に、１年前の自分をみながとれただけ心配するかなとわかると、てくれ、その子どもの成長を感じて嬉しかったと述べている。		Cb 67
Ｂは、子どもに大人の気持ちを伝えるために演技することもけっこうあると述べている。		Cb 68
Ｂは、そういった意味でも色々な職員に協力をもちうこともあったと述べている。		Cb 69
Ｂは、子どもの成長はたくさん感じていると述べている。		Cb 70
Ｂは、特に卒園した子どもの成長が大きいのと述べている。Ｂは、帰ってくる度に在園児の心配をしてくれたり、卒園してからこう思うとか、在園中はこんな気持ちであったとか、いる時にはわかんなかったと述べている。そういった成長が喜ばしいと述べている。		Cb 71
Ｂは、対応の難しかった子どもが卒園してお家へ帰るとすすも嬉しげで、できるようになったことも成長と捉え、喜ばしいことと述べている。		Cb 72
Ｂは、子どもに色々な人に頼っていいということ伝えていといと述べている。		Cb 73
Ｂは、Ｂはずっとホームにいて安全基地にはなるのだけれど、Ｂがその子どもの全てを背負うわけではなく、その子の周りには色々な人たちがいてその子を支えていると述べている。		Cb 74

ゆえに、園の職員だけでなく、学校の先生や父兄の保護者であるとか、多くの人々と繋がることでその時だけではなく長く支えてもらえる子どももいるのは、Ｂのみで色々な人間に散らして、振って、その人からは得意不得意がある、どういった時に誰を頼れば良いか、どんな方法がとれるかを学んでもらうことで、社会に出てから自立に立つのではないかと、思い支援しているとＢは述べている。		Cb 75
Ｂは、卒園生で園にいる時は色々な大人の色々な考えについていけないこともあったが、園に色々な大人がいたから社会にでて戸惑わずに済んだと言っていた子どもがいたと述べている。		Cb 76
その子どもは社会人になって、Ｂから教えたことがそのセンスを活かして、最新の企画係りを任されると話していたとＢは述べている。		Cb 77
Ｂは、社会にでたら色々な人がいるから、園でへこたれていたら社会にでていけない、言える子どもには伝えると述べている。		Cb 78
しかし、Ｂは子どもに含ませており、それを伝えることが難しい子どもには、無理に伝えないのであった。		Cb 79
Ｂは、社会には自分の思っている事と同じ事を思っている人が少ないが、そう思っていることを伝えるようにはしていると思述べている。		Cb 80
Ｂは、卒園生には新たなコミュニティを作っていくと欲しい、担当職員は社会資源のひとつくらいに、どこか隅に置いていてくれれば良いと思述べている。		Cb 81
Ｂは、子どもには卒園しても、何かあればちゃんと受け止めるし、話に来てほしいし、帰ってきてもらいたい、というのを伝えるようにはしていると述べている。		Cb 82
Ｂは、卒園してもいつてもいるからねと送り出して、Ｂでなくても頼れる人がいればその人を頼れば良いし、コミュニティが作れるのであればそれが良いが、どうしてもなくなればいつでも迎え入れるという危機的状況であればサポートする気持ちが強くあるのだった。	Ｂは、卒園してもいつてもいるからねと送り出して、Ｂでなくても頼れる人がいればその人を頼れば良いし、コミュニティが作れるのであればそれが良いが、どうしてもなくなればいつでも迎え入れるという危機的状況であればサポートする気持ちが強くあるのだった。	Cb 83
Ｂは、子どもにＢとの関わりのみで、人との繋がりをもちて欲しいわけではないのであった。		Cb 84
Ｂは、小さなことでも相談してくる卒園生がいると、その姿も愛らしく感じるのであった。		Cb 85
Ｂは、若い指導員にはまずは自分自身のことを知ってほしいと述べている。		Cb 86

Bは、この職業では自分の経験を活かせることはない要因ともなっている。		Cb 87
Bは、職員自身が自分のことをわかってもらうこと、自分と人間を知って欲しいと思う。		Cb 88
Bは、どのタイプの人間かによって働き方が変わる。みんな自分なりのスタイルで生きていく。Bは、自分なりのスタイルを見つけていく。	Bは、どのタイプの人間かによって働き方が変わる。みんな自分なりのスタイルで生きていく。Bは、自分なりのスタイルを見つけていく。	Cb 89
だからといってやめないで欲しいというわけではない。そういう感覚で動いて欲しいと思う。Bは述べている。	だからといってやめないで欲しいというわけではない。そういう感覚で動いて欲しいと思う。Bは述べている。	Cb 90
Bは、若い指導員が自分のことはわかっていくために、まずはその人を観察して、ある程度理解を深めていく。自己理解の手伝いをする。Bは述べている。		Cb 91
Bは、自分で自分のことを知ること、自分のことも大事である。Bは述べている。		Cb 92
Bは、生活スタイルや育ってきた環境で働き方、育ち方が違う。Bは、自分なりのスタイルを見つけていく。		Cb 93
Bは、自分のことを知ってもらうこと、自分のことも大事である。Bは述べている。		Cb 94
Bは、職員の良いところを引き出して、子どもたちに還元してあげたい。Bは述べている。		Cb 95
Bは、自分よりもこの人へと繋げることもできる。Bは述べている。		Cb 96
Bは、Bの思いや感覚は引き継がれていく。Bは述べている。		Cb 97
Bは、子どもたちのことを知っていく。Bは述べている。		Cb 98
Bは、若い指導員が自分のコミュニケーションスキルを引き出すような技術を持つ。Bは述べている。		Cb 99

Bは、声かけや受け入れ方、子どもの見方等について、自分にはないものを持っている。Bは述べている。		Cb 100
Bは、他の職員をみていて参考になる養育観はたくさんある。Bは述べている。		Cb 101
Bは、子どもに対して、自分の許容できる範囲と他の職員の許容できる範囲が違ってくる。Bは述べている。		Cb 102
Bは、他の職員の発想力もすごいと思う。Bは述べている。		Cb 103
Bは、思いつかないようなことも考え出せることがある。Bは述べている。		Cb 104
Bは、人と自分が違うということを楽しめる。Bは述べている。		Cb 105
Bは、価値観が違って働くこともあるが、育った環境や文化が違うからこそ、見方や感じ方が違う。Bは述べている。		Cb 106
Bは、違う価値観を過度に否定的にはみない。Bは述べている。		Cb 107
Bは、自分のことも伝えたいし感じて欲しい。Bは述べている。		Cb 108
Bは、そういった性格のため欲張りだと周りの人から言われる。Bは述べている。		Cb 109
Bは、どこでも生きていけるのが自分の強みである。Bは述べている。		Cb 110
Bは、人見知りなところや、人前で感情的になりやすいところが、人前で話をしていきたいと思う。Bは述べている。		Cb 111
Bは、前向きでもあり、子どもを支援する上での強みとなっている。Bは述べている。		Cb 112
Bは、他者や自分の強みを共有していく。Bは述べている。		Cb 113
また、観察や対話で知れた情報は他の人とうまく共有して、その人を気にかけて、そうできるのは当園のいいところである。Bは述べている。		Cb 114
そういった文化はずっと続いて欲しい。Bは述べている。		Cb 115
Bは、職員ひとりひとりの理解が深い。Bは述べている。		Cb 116
Bは、このインタビューを受けての感想で、おもしろかった。Bは述べている。		Cb 117
Bは、自分を振り返るいい機会になったと思う。Bは述べている。		Cb 118
Bは、ホームが地域に出てからは、他のホームの職員と関わる時間がかなり減ってしまった。Bは述べている。		Cb 119
Bは、他の職員を気にかける役割もしたが、担当職員としても働きたい。Bは述べている。		Cb 120

(4) Bの個別的な心理構造

小舎制の児童養護施設で児童指導員となって約15年になる30代の女性Bは、必要と思われる養育観という言葉に困惑し、答えることに苦戦している (Cb1)。Bにとって、養育観について言葉にするためには、しばらく考える時間が必要なのである。

Bは、子どもに離れられたと感じさせないために、自らの判断で長く所属ホームにいるようにしている。子どもがBを必要としない限り、Bから離れないという養育観が大切であるとBは思っている (Cb2・Cb3・Cb5)。

Bがそう思うようになったきっかけは、学生時代に現職の先輩職員から、自分の子どもとは家に帰れば親に戻れるが、園の子どもにおいては、3日も不在になれば関係性が希薄になってしまうということを聞いたことである。そのため、できるだけ園にいるようにしているのである (Cb6)。また、小舎制の児童養護施設や住み込みで働くことについて、県外の施設実習を通して知り、誰かがいることが当たり前のおうち作りをしたいと思ったのである (Cb7)。

またBは、入職当初は子どもが次いつ来るのかとか、同じ絵本をまた読んでねとせがむ姿や、今日は誰がご飯と一緒に食べるのか確認する子どもの姿をみるのがすごく苦痛であった。Bは、大人と一緒にいたいと子どもの心が痛み、それを受けて自身の心も痛むことを避けたかった。子どもに明日もいるよといえるように、ずっと一緒にいることができる住み込み職員になりたいと思うのであった (Cb9・Cb10・Cb13)。子どもの中ではひと月のうちに一日でもいなければいつもいないことになってしまうので、いつもいると子どもに感じてもらえるように、Bは働こうと思っているのである (Cb17)。

Bは、当時4歳の男児がC職員が宿直の時には横で寝て、D職員とE職員の時にはベッドまで来てもらって寝かしてもらい、F職員の時にはスリッパで誰かを確認して寄り付かず、Bの時には自分のベッドで一緒に寝てもらおうという動きをみて、こんなに幼い子どもが誰が宿直かによってこれだけ色々な動きをすることに驚き、いつ目が覚めても安心できる人がいるのが大事だと思ったのである (Cb15)。Bは、以前は小さい子どもの方がBがいつもいる職員であることを感じ取るまでに時間を要すると思っていた。しかし、実際は大きい

子どもの方が、Bがいつもいる職員だと感じ取るまでに時間を要することに、Bは衝撃を受けたのであった (Cb20)。

Bは、子どもにもよるのであろうが、新しい環境の中で子どもの世界を広げていく際に、いつもいる大人という軸があることで、そこから外へ出たり戻ってきたりすることができるのではないかと生活支援の中で実感している (Cb21)。それゆえ、Bは、入所してきた子どもがBが毎日いる人だと分かるまでは、特にホームにいるようにしている (Cb4)。Bは、毎日いて軸になる大人だけが中心となるのではないが、軸になる大人は子どもが世界を広げていくための最初の地点くらいにはなるであろうと考えて子どもと生活をしている (Cb22)。

Bは、傷ついて入所してきた児童の回復過程においても恐らくこの軸という安全基地の役割は必要であると考えている (Cb23)。Bは、性的虐待で入所してきた高校生女兒Gについて、沢山の大人が関わればいいというわけではないと思った (Cb25・Cb28)。それゆえ、他職員には早めに帰宅してもらい、Gがもやもやとした気持ちをひとりで抱えてしまわぬよう、性的虐待についてGが話をしたくなかった時には話ができるような空間作りをし、BとGとの個別の時間を通じての関係作りに配慮していた (Cb24・Cb26)。Bは、生活の場でリラックスした雰囲気を大事にするため、敢えてリビングでごろごろしたり、テレビを見たり、一緒に横になったりしながら、長い期間Gとの関係づくりを行っていた (Cb30・Cb33・Cb35)。

Bの家庭は転勤族であったので、転校先で自分が人の輪の中に入ることでその空気がどのようになるかを気にしながら育ってきた。Bは、人の目を気にし、人をよく観察することを習慣的に身につけてきたのだった (Cb38)。Bは、色々な出会いや別れを経験しているため、自分は感受性が強いほうだと思うと自己分析している。Bは、一般的な女兒のグループを作る習性が苦手で、ひとつのグループにいることは好まず、色々なところでそつなくこなすタイプの子どものであったと振り返っている (Cb39・Cb40)。

Bは、感受性を強く保ち、生き抜いていくために新しい環境に適応していくスキルを獲得してきた (Cb41)。自身の体験が、入所してきた子どもの不安定な感情の理解に繋がっていると思うので

あった (Cb42)。Bは、以前いた場所に後ろ髪を引かれる思いがあるのはわかるが、それを気にしていたら生きていけないと思っている。新しい環境で自分がなじまないといけなとか、慣れないといけなという戦いにも似た感覚を覚えており、入所児童の気持ちを理解してやりたいのである (Cb43)。

Bは、子どもの問題行動の予防は難しいと思っている (Cb44)。自分ひとりでは気持ちに余裕がなくなり対応できないので、色々な視点を持った所属ホームの別の担当職員やホーム外の職員、学校の先生等に協力を求めるしか予防する方法はないと思っている (Cb45・Cb46・Cb48・Cb50)。Bは、問題行動の兆候がなければ予防をすることも難しいと考えている (Cb47)。施設の子どもの限らず、すべての子どもに問題行動はあるものだと思っているBであるが、子どもの家庭環境によってそれが起こるかどうかは決まってくると考えている (Cb51・Cb52)。

問題行動の事後対応については、予防とも関連してくるとBは考える。子どもたちのケアは丁寧にと考えて養育しているが、問題行動が起こってしまったら、Bはもっとやれたとか別のやり方があったのではないかと自問し、自らの支援で足りない部分があったであろうと反省する (Cb53・Cb54)。またBは、問題行動の原因になったことがわかるようにその子どもと話をし、表現の仕方については、して欲しかった表現を伝え、子どもの見直す必要があることは伝えていくのである (Cb58・Cb59・Cb60)。

当園は、問題行動が起こった際には、担当職員だけでなく職員全体で子どもに関わる。そのため、Bは他の担当職員も問題行動が起こった後には、同じように対応していると思っている (Cb62・Cb63・Cb69)。Bは、所属ホーム内でも、個人の考えで援助方針を決めずに、チームで話し合っ決めてところがあり、他の職員への信頼が厚いのである (Cb29・Cb64)。

Bは、子どもの心の成長で喜ばしいことについて、中学生の女兒Hの話をあげている。Hが最近Bに相談しに来て、姉にすごく苛々するが、苛々するのはその姉のみで他の人にはなく、自分で線引きはしていると話をしたことから、Bは自分と心の距離が近い人に対しては要求も増えてしまうものだと言ったという (Cb65)。Hはその話を聞いて、学校で他児が親の文句を言うことと自分

が抱えている苛々の感情に近いことに気づいてBの説明に納得した。苛々を爆発させる前に言葉で表現していることにBは感心し、その女兒の成長を感じて嬉しく思った (Cb66)。

別の事例では、卒園した子どもが中学3年生の時に塾から帰ってくるのが遅く、敢えて職員が大々的に捜索したようにみせて、すごく心配したことを伝えることがあった。その時はその子どもは素直に反省はできなかったものの、1年後にひとつ年下の子どもの同じような行動をとった時に、1年前の自分をみているようだと言われ、待っている人がどれだけ心配するか今ならわかると言ってくれ、その子どもの成長を感じてBは嬉しかった (Cb67)。

Bは、特に卒園した子どもの成長が大きいと感じてきた。帰ってくる度に在園児の心配をしてくれたり、卒園してからこう思うとか、在園中はこんな気持ちであったとか、いる時にはわからなかったとか、そういった成長が喜ばしいのであった。対応の難しかった子どもが卒園してから、お疲れ様ですと挨拶ができるようになったことも成長と思え、Bは喜んだのであった (Cb71・Cb72)。

日々の養育において、Bのみで子どもの色々な質問に答えはしない。その分野が得意な人に敢えて振ってみて、人には得意不得意があることや、どういった時に誰を頼れば良いか、どんな方法がとれるかを子どもに学んでもらうことで、社会に出てからも役に立つのではないかとBは考えている。園の職員だけでなく、学校の先生や友だちや友だちの保護者であるとか、多くの人々と繋がることで、その時だけではなく長く支えてもらえる子どももいる (Cb75)。Bはずっとホームにいて安全基地にはなるのだけれど、Bがその子どもの全てを背負うわけではない。その子の周りには色々な人たちがいてその子を支えているということ、色々な人に頼っていいことを感じて欲しいと思っ

てBは養育している (Cb73・Cb74・Cb96)。

卒園生Iが園にいる時は色々な大人の色々な考えについていけないこともあったが、園に色々な大人がいたから社会にでも戸惑わずに済んだとBに話した (Cb76)。Iは社会人になって、Bから教えられたユーモアのセンスを活かして、最初で躓かずに適応できた。今でもイベントの企画係りを任されているほどである。 (Cb77)。Bは、社会にでたら色々な人があるから、園でへこたれていたら社会にでていけないと、言える子どもには

伝えているが、Iもそのひとりであった (Cb78)。しかし、Bは子どもに合わせており、それを伝えることが難しい子どもには、無理に伝えないのであった (Cb79)。

Bは、社会には自分の思っている事と同じ事を思っている人の方が少ないが、そういった中でも色々な人に頼って生きていけることを伝えるようにしているのである (Cb80)。Bは、卒園生には新たなコミュニティを作っていって欲しいし、担当職員は社会資源のひとつくらいに、どこか隅に置いていてくれればいいと思うのだった (Cb81・Cb84)。

Bは、卒園してもいつでもいるからねと子どもを送り出している。Bでなくても頼れる人がいればその人を頼れば良いし、コミュニティが作れるのであればそれが良いと思っている。しかし、どうしようもなくなればいつでも迎え入れるといった、危機的状況が子どもに訪れた場合にはサポートする気持ちがBには強くあるのであった (Cb83)。小さなことでも相談してくる卒園生がいると、その姿もBは愛らしく感じる (Cb85)。

Bは、職員自身が自分のことをわかっておらずに、すごいしんどくなってしまうこともあるから、自分の生い立ちや自分がどういう人間かをまずは知って欲しいと思っている (Cb87・Cb88)。この職業では自分の経験を活かせることもあるが、子どもとの関わりにおいてはうまくいかない要因ともなることをBは経験的に知っている (Cb87)。どのタイプの人間かによって働き方も変わってくるであろうし、Bのような働き方をすることが全てではなく、働きながら職員が客観視する力を身につけ、それに応じて働くスタイルを見つけていって欲しいと願うのである。だからといってやめな

い欲しいというわけではなく、そういう感覚で勤めて欲しいと思っているが、一方で同時に自分の価値観が全てとは思っていないのである (Cb90)。

Bは、まず若い指導員を観察して、ある程度どういった人かわかれば、覆っているものを崩していく (Cb91)。生活スタイルや育ってきた環境で働き方も変わり、職員同士ですり合わせが必要な時もある。互いにわかり合うためにも、自分のことを見せようとしな

うに、若い指導員と関わっているのであった (Cb92・Cb93・Cb94)。

Bは、若い指導員が自分のコミュニケーションスキルを上げていき、子どもの素の部分を引き出せるような技術を身につけていくことを願っている (Cb99)。そのためにはまず、職員の良さをBが引き出して、子どもたちに還元してあげたいと思っている (Cb95)。そうすることで、自分よりもこの人へと繋げることもできるからである (Cb96)。

Bの思いや感覚は引き継がれていって欲しいと考えている (Cb97)。Bは、子どもたちのことを知っていくためにも、自然と子どもの良さを引き出せるようになるためにも、必要な感覚であると思っている (Cb98)。

Bは、他の職員をみていて参考になる養育観をたくさん感じている (Cb101)。子どもへの声かけや受け入れ方、子どもの見方等について、自分にはないものを持っている職員をみるとすごいと思うのである (Cb100)。子どもに対して、自分の許容できる範囲と他の職員の許容できる範囲は違っている。許容できる範囲が大きい人を見るとその感覚を取り入れたいと思うが、B自身がそうなるのは難しいと思っている (Cb102)。Bは、他の職員の発想力もすごいと思っており、Bでは思いつかないようなことも考え出すことがあるので感心し、発想の豊かさにおもしろさを感じるのである (Cb104)。

Bは他の職員と価値観が違って憤ることもあるが、育った環境や文化が違うからこそ、見え方や感じ方が違うわけなので、自分の感じ方のみではもったいないなと思っている (Cb106)。違う価値観を過度に否定的にはみず、人と自分が違うということをBは楽しんでいる (Cb105・Cb107)。Bは、自分のことも伝えたいし感じて欲しいし、人のことも知りたいし感じたい (Cb108)。そういった性格のため欲張りだと周りの人からBは言われる (Cb109)。Bは、どこでも生きていけるところや、前向きなところが、自身の強みであると認識している (Cb110・Cb112)。人見知りなところや、人前で感情的になりすぐに涙がでてしまうところは直していきたいと思っている (Cb111)。

Bは、他者や自分の強みを共有していくには、他者を観察して知って、話をして知ることが大事であると思っている (Cb113)。また、観察や対

話で知れた情報は他の人とも共有して、その人を気にかけて、どうすべきか考えていく必要があるし、そうできるのは当園のいいところであるとBは主張する (Cb114)。職員ひとりひとりの理解がいい意味で広がり深まると良いと思い、そういった文化はずっと続いて欲しいとBは願うのであった (Cb115・Cb116)。

(5) AとBの叙述から得られた一般的心理構造

AとBの個別心理構造を基に、想像自由変容を用いて、一般的心理構造を下記に叙述している。主語は、Participants (P) と記してある。

(6) 一般的心理構造

小舎制の児童養護施設に勤めて、長く働くPは、施設で勤めるにあたって必要と思われる養育観について語る際には、その感覚の説明に苦戦する。Pは養育観について頭の中で整理しながら、子どもと共に生活する生活者として、同じ時を長く一緒に過ごすことが必要な養育観であると答えを出す。Pは子どもの主体性を重んじ、子どもの魅力が十分に引き出される生活空間作りを養育の柱と捉えて、日々の生活を営んでいるのである。

Pは、難しいことではあるが、子どもも施設職員も自分のことを知ることが、生きていく上で、あるいは働く上で欠かせないものになると考えている。子どもにとっては、自身の体力や食の限界、また十分な睡眠時間の確保の仕方に気づいたり、人との距離感やそれに伴う自身の心理状態に気づいたり、自分の過去に起こした行動を振り返ることができたりすると、子どもがより良く生きられる契機となり得る。そのため、Pは自己理解を深めていくことを促すのである。また、職員自身も、自分の好きなことや嫌いなこと、して欲しいこととして欲しくないこと、生い立ちやパーソナリティのタイプについて洞察することで、自身の持ち味を活かせると確信している。まずは、自分を理解し、他者にもその理解する力を援用することで、コミュニケーションが円滑に進むと考えるのである。

所属ホームにてPは、自然体でいられることを心がけ、自分ひとりではなく、チームで子どもの支援をしていることを意識している。子どもを養育していく上での強い責任感は保ちつつ、程よく力を抜き、自分らしくいられる過ごし方を見つけていくことが長くこの職を続けていく秘訣でもあ

ると実感している。加えて、子どもが施設という小さなコミュニティの中でさえ、色々な考えや価値観を持った大人が多くいることを経験していくためにも、大人の個性が大切にされ、それぞれの得手不得手に応じたチームワークを構築していくことが、子どもにとってもプラスの影響をもたらすとPは感得しているのであった。

生活支援においては、Pは自分の考えがすべてとは思っておらず、子どもの気持ちを押し量り、別の職員であればどのように考え行動していくのかを、自然と見立てるのである。子どもが何をどのように感じているかと、職員が気になることがあっても、子どものペースは乱さずに、発信があれば受け入れるスタンスを保っている。子どもが相談してくる時間や場所、空間が適切か判断して、発信のしやすい環境作りを心がけ、子どもの気づきを優先させているのである。

子どもが起こす問題行動については、予防は難しいと考えており、何かのメッセージであると受け止め、大人が自省し、再度必要な支援を模索していく姿勢を重視している。問題行動を予防する観点においても、起こった後の事後対応でも基本的な考えは似通っており、子どもが伝えたいことを丁寧に受け取りなおして、職員の支援を見直すと同時に、子どもへもして欲しかった表現を伝え、社会的規範の教育を試みるのであった。

Pは、子どもを支援していく上で、自分や他の職員の強みを共有し、広げていくためには、よく人を観察し、語り合うことであると考えている。時には、施設で積み上げてきた歴史を伝え、行動観察や対話で知りえた情報は他の職員とも共有するのである。職員ひとりひとりを気にかけて、どのようにフォローできるかを考え、若手のやる気や強みを引き出し、大人同士の理解が深まるように、様々な工夫を凝らすのであった。Pは、他の職員を信頼し、感謝の気持ちを強く持ち、チームワークが高まるように、子どもの養育に携わっているのである。

(7) 討論

Pの養育観についての経験

本研究を通して、児童養護施設で働く職員の養育観にまつわる経験について、以下のことが考察された。

小舎制という養育体制で働くPにとって、子どもと一緒にいる時間そのものが尊いものであるこ

とが示唆された。子どもの個性が育まれつつ、人を含めた子どもを取り巻く環境が、その子の人生全体を豊かにできるよう、Pは生活の中のしつらえを重視していると考えられる。

Pは、児童養護施設での養育は、仕事であるが仕事でないという感覚をもち、勤務時間や労働の負担は気に留められずにいる。子どもが施設という環境の中で、Pの愛情を軸に、多くの人々のサポートを受けて育つということに価値を置き、子どもと生活をしているのである。

そこには安全基地 (Ainsworth, M., 1982) の機能が自然と働いていると考えられる (Bowlby, J., 1969/1982)。子どもの精神的な軸となる職員がいることで、子どもを取り巻く世界の中で子どもが躓いたとしても、その職員の基地に戻り、安心感を得て、もう一度挑戦したり冒険したりするという連続性が生じる。その中で、子どもの健全な心身の発達が促されることが考えられる。Pが養育観を断定的に捉えていないところや、問題行動という行為を多角的に捉えているところから、子どもの関わりや見立てにおいても同様のことが起こり、多層的・多面的視座の基に生活支援が行われていることが予測される。

Pは自他の理解の必要性についても、生活支援の中で経験している。まず子どもに対しては、大人の社会規範、教育的視点やしつけの観点からのみ理解するのでなく、子どもが何を感じているか、何を考えているのかといった感情や認知の理解から入っていき、それに伴う行動の理解も丁寧に行うことを心がけているといえる。また、子どもの様々な言動に対して、自己を振り返る視点も持ち合わせており、子どもの良き面の共有を図るところからは、「子どもの成長や変容を一方向的に期待するのではなく、内面に秘められた潜在可能性を信じ、子どもとの出会いから素直に学ぶ姿勢が望まれる」(全国児童養護施設協議会, 2008) という子どもが求める大人像にも当てはまることが示唆される。Pは大人の多様性に関しても感受性が強く、大人の個性も子どもに還元され、子どもの世界と大人の世界のコミュニケーションが好循環として機能するように、生活そのものを支えていると考えられる。

また、Pはコミュニティあるいはソーシャルサポートに対する意識が高いことが示唆された。Pの養育は、子どもが大人になった時に、適応的に生きていけるように、その素地を育てることに力

点が置かれていることが考えられる。Pのみに依存せず、色々な得意不得意を抱えた大人の得意な部分を知って頼り、必要な時にはヘルプを出して、様々な人に支えられ見守られていることを感じて欲しいのである。適度に人に頼っていくという自立の仕方を願っていると考えられる。Pは、施設を出れば関わりが終わると思っておらず、永続的に必要な時にはPのもとへ帰ってきてても良いし、社会資源の中のひとつとして役立てて欲しいと考えているのである。将来的な展望も視野に入れた、今現在の支援といえる。

関わる職員がどういった姿勢で生活支援を行うべきかという点に関しては、チームワークの重要性が強調されていた。児童施設においては、職員の個の力量が求められがちであるが、田嶋(2011)は、パラダイムシフトの必要性を謳っている。多次元のパラダイムシフトが求められるが、そのうちのひとつに個の処遇から、フォローし合う養育への転換も強調されている。しかし、Pが経験している、職員の個性や持ち味が活かされたチームワークというところまで、深く議論されていない。職員のひとりひとりの個性が活かされかつそれが子どもにとって良き個のモデルや大人チームとしてのモデルとなり、子どもの個性が伸びる養育が求められるといえる。

児童養護施設で働く上で必要な養育観とは、軸になる職員が子どもと共に生活することを楽しむことができ、子どもの“いま”のみに着目せず少し先のことや遠い未来のことまで想像ができる養育の感覚であることが示唆された。そして、Pは支える大人集団の円滑なチームワークが展開されることを重要視している。すなわち、個の特性が尊重される環境が子どもたちを包むことで、子どもたちの心身の健全な発達が促されると経験しているのだった。

展望

本研究では、児童養護施設で勤務する職員の叙述を通じて、筆者が子どもへの関わりが好ましいと考える職員が日々の養育の中でどういった養育観を重視し子どもと生活しているかについて検討してきた。

本研究の2人の研究協力者は、小舎制児童養護施設で勤務している。小舎制とは、児童養護施設の中で、児童が生活する単位として、小舎と呼ばれる単位で生活している。小舎制は、児童が生活する単位として、小舎と呼ばれる単位で生活している。小舎制は、児童が生活する単位として、小舎と呼ばれる単位で生活している。

施設の職員であり、本体施設とは離れた地域での養育者である。児童養護施設全体としてみると、希少な労働状況下にあるが、2人の経験には共通するものが少なくなく、心理学的に不変的な叙述ができたといえるだろう。しかしながら、児童養護施設の勤務形態は多様である。

今後は、大舎、中舎、小舎、といった体制の違い施設の職員や、その中でも雇用形態の異なる職員、また異なる性別や勤務年数を有する職員へもインタビュー調査を行うことにより、包括的な叙述をすることが求められるであろう。

謝辞

本研究にご協力くださった2名の調査協力者の方々には深くお礼申し上げます。また、研究のご指導を下された佐賀大学の石井宏祐先生にも心よりお礼申し上げます。

文献

- Bowlby, J (1967/1982). In. Attachment and loss : Vol. 1. Attachment. Basic Books : New Yoek.
(Original work published 1969)
- Giorgi, A. (2009). The descriptive phenomenological method in psychology: A modified husserlian approach. Duquesne University Press. 吉田章宏 (訳) (2013). 心理学における現象学的アプローチ。理論・歴史・方法・実践。新曜社。
- 石井宏祐 (2016) 心理臨床における嗜癲の解決 努力と脱嗜癲的アプローチに関する研究ー嗜 癲当事者、嗜癲者家族、援助専門家のコント ロール感に直目してー。東北大学博士論文
- 加藤尚子 (2012) 施設心理という仕事ー児童養 護施設と児童虐待への心理的アプローチー ミネルヴァ書房。
- 厚生労働省による行政説明資料ー児童家庭福祉の動向と課題ー平成29年4月25日・児童相談所長研修〈前期〉。
- 田嶋誠一 (2011) 児童福祉施設における暴力問題の理解と対応ー続・現実に介入しつつ心に関わるー 金剛出版。
- Wertz, F.J. (1983). From “everyday” to psychological description: An analysis of the moments of a qualitative data analysis. Journal of Phenomenological Psychology, 14(2).
- 全国児童養護施設協議会 (2008) この子を受け止めて育むためーみー育てる・育ちあういとなみー児童養護における養育のあり方に関する特別委員会 (委員長 村瀬嘉代子) 報告書。

Phenomenological analysis on effective strategies for nurturing children in a childcare facility

NASHIRO Takuya

In this study, two care workers working in a childcare facility were interviewed about their facility. In the analysis, the general psychological structures were derived from each care worker's individual psychological structure. In this facility, there has been an increase in abused, troubled children (for example, due to domestic violence), which led to increased violence in the facility, worse relationships between children and care workers, and burnout of care workers. It is urgent to prevent such problems. From the interview with the two care workers who have already delivered high quality care, this study aimed to find effective strategies for supporting these children.

A phenomenological psychological approach developed by Giorgi was used as a research method. The non-structured interview with the two care workers was transcribed word for word. The individual psychological structures were broken down into meaning units, which were then used to describe general psychological structures.

The analysis shows that the following components are necessary for supporting the children in the facility ① respectful space for children, ② having hope for children to receive love and social support, ③ care workers' leadership to support children's mental and physical growth, ④ respect and understanding of each other, ⑤ helping children learn to appreciate different personalities in the facility, ⑥ understanding children's feelings, ⑦ good communication among care workers in order to maintain excellent teamwork.

KeyWords: effective strategies nurturing children, childcare facility, phenomenological analysis